

## 退任記念「最終講義」

新しい歩みのために  
— 創造的出会いと人間形成 —

田 浦 武 雄

## 序

私は 2004 年 3 月末をもって学長を退任するに当たり、最終講義を 1 月 30 日に行う機会を得た。学生の皆さんは、これからの新しい歩みのために、創造的出会いと人間形成を、自己教育のフロンティアとして考え、意欲を持って、常に自己の課題解決にチャレンジすることが必要であり、大切であると考えている。以下、章節を追って、私の考えを述べていくことにしたい。

## 1. 平和な生きがいのある社会の担い手の一人になろう

## (1) 私の原爆体験から—— No More Nagasaki, Remember the Atomic Bomb

戦後 60 年近く経って、戦争体験者も高齢化したり、亡くなったりしており、また学校で原爆について学ぶことも少なくなり、原爆の悲惨さの認識も次第に薄くなり、風化されてきたようにみえる。私は長崎で直接原爆で傷ついたわけではないが、その悲惨さを見聞したものとして、その体験をまとめておくことが必要であると考えた。以下の文章は 1950 年頃にまとめておいたものの要旨である。

昭和 20 (1945) 年の夏、私は病後静養のため大学を休学して、長崎県の喜々津村 (長崎市の北方 25 キロの地域、現在の多良見町) の家に疎開していた。8 月 9 日は夏らしい暑い日であった。昼前の一時空襲警報が解除されたので、私は家から外に出て芋畑の草むしりをしていた。戦争が激しくなり戦局は日に日に悪くなり、アメリカ軍機の来襲も硫黄島やサイパン島を基地として激化している頃であった。少しくたびれたので、腰を伸ばし青い空を我を忘れて見つめていた。11 時 5 分頃、ピカッと恰も稲光のように光った。何だろ

うかと疑いをもつ思いを追いかけるかのように、ドカーンという響き。これが一瞬にして 7 万人の市民の生命を奪った長崎の原子爆弾の運命のひとつときであったのである。

ちょうど 8 月 9 日の朝早く、長崎の家から私に連絡があり、長崎の家一帯が強制疎開の対象になったので、手伝いに来ようと言うことであった。すぐ出かけていたら、おそらく原爆の直接の被害を受けたと思われる。偶然とはいえそのさい、人間の運命を感じた。8 月 6 日に広島に落とされた原爆はウラン原爆で、長崎のはプルトニウム原爆であったということは、後になって知った。広島に死者が長崎に比べ、14 万人と多かったのは、原爆が広島では平地の上空で落ちたのに対して、長崎では浦上天主堂近くの山峡に落ちたためと考えられる。11 日になって列車が長崎駅の二つ手前の道ノ尾まで開通したので、湯をつめた水筒と握り御飯をもち、必要な装いをして独りで出かけた。道ノ尾駅から長崎駅前までは約 6 キロの道を歩いて行かねばならなかった。爆心地の山野は灰色の姿に変わり、眺めやる眼には多くの痛々しい人間の死体と自然の廃墟がとびこんできた。まだ立ち上ぼっている煙が激しかった火災の名残をとどめ、路傍のあちこちには、馬や猫の死体があり、胸がむかつく死臭がただよい、途中で引き返そうかと思った。やっとの思いで長崎駅前の自分の家があった所へ辿りついたが、三階建ての旅館の建物は焼け落ちて、15 センチくらいの厚さの灰と化しており、まだ熱くて近よることは出来なかった。その日は近くの丘の中腹にある町の防空壕の中で一夜を明かした。

それにしてもどうしてこういう強力な爆弾が投ぜられたのであろうか。その疑問が私の頭の中を去来した。日本の戦争指導者を屈服させるためと、

戦争が永びいて多くのアメリカ兵の生命を失うことを避けるために、原爆を使ったとされるかもしれないが、逆に多くの日本人市民の生命を奪うことになったことは、誠に残念なことである。

8月15日に終戦の大詔が発せられ、無条件降伏ということで戦いは終わった。国民の間には、「軍閥や財閥に踊らされた」、「日本は神の国ではなかった」など、自暴自棄の言葉がつぶやかれた。君民一体といった国体も、たがが外れた桶のようにばらばらになってしまった。これからは目に見えにくい社会的認識という綱によって結び付くことを通して、新しい国家を形成して行かなくてはならない。

「これからどうしたら良いのだろうね」、8月末頃のある日の夕食後のひととき、母はそう呟いた。「旅館は家が資本なのに、その家が焼けてはどうしようもない」。我が家に一大試練が襲ってきた。皆で時間をかけて相談したあげく、兄夫婦は長崎に出て職を探すことにし、私は東京大学に復学することにした。それぞれが不安と希望を抱きながら。

あの敗戦の日から60年近くたった今日では、人類を何十回と殺戮出来る量の原爆や水爆等が、アメリカ、ロシア、フランス、中国等で貯蔵されている。私がここで、No More Nagasaki, Remember the Atomic Bombを強調するのは、原爆の悲惨さの認識を高め、原爆戦争を絶対に引き起こしてはならないことを戒めるためである。

## (2) 止揚学園での一つのエピソード…数と個体認識の問題

止揚学園は滋賀県能登川町にある障害者養育施設として知られている。私は時々献金をしているが、先日頂いたお礼の手紙に感心させられた。その要旨をまとめてみよう。

心温かいお祈りと、やさしい愛の心を送って頂きありがとうございます。田浦様、皆様の温かさは、私たちが知能に重い障害を持つ仲間たちと生き活きと歩む源です。

先日、卵料理の時、入園している仲間のカツミさんが「たまごわりたいな」と言ってくれました。数をかぞえることが難しいカツミさんに、(どうして50個の卵を割ってもらおうかな) と思っていますと、「ヤヨイさんのたまご、カオルさんの

たまご、イチローさんのたまご、おいしそうやな…」とニコニコ語るように、割ってくれたのです。私たちはつい数に頼ってしまいましたが、カツミさんのように食べてくれる人の顔を思い、準備をすると、その優しい心が他者を潤し、活かすのだなあと胸があつくなりました。ご健康を心よりお祈り申し上げつつ、お礼にかえさせていただきます。

このエピソードは、人間の能力を云々する際、数能力のような一つの基準から特に判断することなく、他の能力例えば個体認識や個体識別能力等も視野に入れる必要があることを教えている。この問題意識に関連して、映画監督の羽仁進氏の『2たす2は4じゃない』<sup>(2)</sup>の中の話の思い起こした。同氏が、多くの牛と山羊を飼っているアフリカの原住民の家の近くに住んでいた時の話である。彼等は数能力が低く、2たす2はたくさんとしか答えられなかった。ところが夕方になって、牛の群れを連れて子どもが帰ってくると、父親がその群れをみて、一頭でも足りないとすぐそのことに気付くのである。羽仁さんは彼等を観察しているうちに、彼等は自分の管理する牛の一頭一頭の特徴を見分けていたのである。彼等は粗末な数体系しかもっていないが、優れた個体識別能力を持っていたのである。

この話は教育を考える上で、重要なことを示している。それは民族によって数体系をもっているものもあれば、個体識別能力に優れているものもあるということである。文化の多様性に注意する必要があることを教えらる。

## (3) ユニセフの活動から

UNICEF(国連国際児童緊急基金)は1946年に設立され、1953年にUNCF(国連児童基金)と改称されたが、ユニセフの名称はそのまま用いられてきている。最近のリーフレットによると、3000円の支援があれば、ノート、鉛筆など最低限の文房具を貧しい国の子ども13人に支給できるということである。私も時々寄付をしているが、お互いに色々の経費を節約して、ユニセフの活動を支援していきたいものである。

## 2. 資格社会への対応

### (1) 自己の才能の発見と伸張

これからの社会では、社会的に有用な資格を重

視する傾向を強められる。学生が自己の才能や賜物が何かを自覚し、それを生かして、自分の適性に応じた有用な資格をもつことが大切である。それなくしては、これからの厳しい社会を生きぬくことは困難である。才能や賜物も日頃の粘りづよい努力をしないで伸ばすことは出来ないことを、特に自覚しておくべきである。

### (2) 社会の要請に応える知識・技能の育成

保育者を志す場合、社会の要請に応える専門職としての知識・技能を磨いておかななくてはならない。専門職については1966年のILOとユネスコによる『教員の地位に関する勧告』<sup>(2)</sup>で、教育の目的として人格の発達、平和への貢献等を重視し、優れた知識・技能と、生徒の教育と福祉に対する責任感とを磨くことを要求している。保育のプロとなるための自覚をもち、研鑽を積むことが必要である。具体的には技能の面では、ピアノ等の演奏、多様な遊びの指導、本の読みかき等々の能力を鍛えておくことが望ましい。

### (3) 人間性の育成

保育者を志す場合、保育に関する知識・技能だけではなく、子どもと教師仲間とを愛し愛されるような豊かな人間性や人柄の育成が大切である。子どもに接する際には、子どもの目線に沿って、賞めて育てることを基本とするべきである。管理主義的な保育を避けなければならない。人に怪我をさせるような行為は注意したり制止しなければならないが、その際には、なぜ注意したかの理由を子どもに分かりやすく説明しておくことが望ましい。できるだけ外発的動機づけに止まらず、内発的動機づけを重視したい。子どもが頑張ったときの達成感を大事にし、賞めて励ましてやる必要がある。

## 3. 社会的教養の向上

### (1) 文化的リテラシーの育成…情報リテラシーを含めて

リテラシーは識字力と訳されてきた。国連は、1990年をInternational Literacy Year (国際識字年)とし、世界的に識字力の向上を計ることを強調した。アメリカでは1980年代の後半に読み書き等の識字力を高めるだけに止まらず、文化的リテラシー (cultural literacy) という概念が注

目を浴びた。文化的リテラシーの観点からの教育改革論議が広く注目を集めるようになったのは、1987年に出版された二つの著書、シカゴ大学哲学教授アラン・ブルーム (Allan Bloom, 1930-1992) の『アメリカン・マインドの終焉：高等教育はいかにして民主主義を損ない、こんにちの学生の精神を貧困にさせてきたか』<sup>(3)</sup>と、バージニア大学英文学教授 E. D. ハーシュ (E. D. Hirsch, 1928-) の『文化的リテラシー：全てのアメリカ人はなにを知る必要があるか』<sup>(4)</sup>とによってである。前者は高等教育を、後者は初等・中等教育を論じているという点で違いはあるが、価値相対主義やリベラリズムの教育に反対し、古典を重視した学習を必修とし、アメリカ文化の共通知識の教え込みによって、ナショナル・アイデンティティの確立を目指している。人間の教養として、古典を軽んじてはならないが、アメリカ教育の活性化のためには、70年代以降の教育の人間化運動の長所を受け継ぎ、一国繁栄主義に終わることなく、人類志向の哲学をもち、情報リテラシーをも生かしていくことが必要である。

学生はこれからの情報社会の進展に対応し、情報の収集・発信のため、コンピュータ等の操作能力を高めるとともに、情報環境に対する判断力の育成が大切である。なぜなら情報環境、特に映像的環境は、人々の情緒的共感を高める力を持っており、それが提示するものには、何らかのバイアスによって歪められているものもあるので、それらの是非を適切に判断する力を育てておくことが重要である。また情報リテラシーは、情報に関わる技術の面だけではなく、情報倫理すなわち情報社会に必要な倫理的ルールを身に付けておく必要がある。<sup>(5)</sup>

### (2) 政治的基礎能力の向上

政治的基礎能力は民主主義の理解に左右されると言っても良い。目先の選挙のことや利権のことしか考えない政治家が多いとか、選挙に行かない国民が多いということは、よく批判される現象である。このような現象が改善されない限り、日本の将来は暗い。若い人々が政治的無関心に陥ることなく、民主主義についての理解を深める努力が必要である。民主主義は、日本では、自分の力で生み出してはいない。日本の全体主義が敗戦によ

て衰退した結果、それにとって変わるものとして、占領軍によって奨励されたものである。しかも数年たたないうちに、朝鮮戦争をきっかけに、日本の民主化の路線がよくなり、日本の旧勢力が復活し、その影響が今日に及んでいる。民主主義もせいぜい多数決政治として考えられ、それに比べて肝心な生活様式や思考様式としての民主主義の考え方は弱い。民主主義については、後の章で更に詳しく論議したい。

### (3) 学びからの逃走の克服

今日の学生は、書物を読まない、考えない、学習に時間をかけないといった批判を耳にする。特に読書の質と量とが、その人の一生を左右するといってもよいので注意したい。優れた文章で書かれた書物に接することは、その人の表現力を豊かにする。時間のふりにかけられた書物に親しむことは、思想を鍛える栄養となる。確かな知識を与えてくれる書物は、現代社会を生き抜く力の源泉でもある。読む、聞く、視るという記号解読過程とともに、話す、書くという記号化過程の訓練が必要である。読書が深いか浅いかの質は、言語の理解力と経験の深さに左右されることにも注意したい。物事をじっくり考え、学習に時間をかける生活習慣を身につけることが必要である。

## 4. 創造的出会いの学習

### (1) 既知をバネにして未知を切り開く創造的思考力の育成

在来の学力論で重視してきた知識の記憶力、知識の量的ストックも重要であるが、これからの社会では、既知をバネにして未知の領域や未来を切り開く創造的思考力の育成が重視される必要がある。これからの教育では、文化や科学の遺産としての知識の系統的指導も必要であるが、課題にぶつかり、あれかこれかの選択的思考を働かせ、解決方法を見出す課題解決学習や発見学習のようなやり方を身につけるようにすることも大切である。

### (2) 人格的出会いの重要性の認識

人生においては多くの出会いがあるが、人格の成長には出会いの質が問題である。優れた出会いによって、その人の信仰や価値観が大きく変わり、生きがいの創造が行われる場合がある。出会い

(Begegnung) という語が思想的に有名になったのは、イスラエルの哲学者マルチン・ブーバー (Martin Buber, 1878-1965) の『我と汝』(Ich und Du, 1923年)<sup>6)</sup>によってである。彼は人間関係において「我とそれ」というような、他者を手段視していくのではなくて、神との出会いに支えられた人格的呼応関係の確立の重要性を強調している。彼の教育哲学によれば、伝統的教育も新教育も自由の真の意味を理解しておらず、真の自由とは強制の反対ではなく「出会い」への自由であり、汝としての教師や教材とに出会い、それらを通して伝統的価値も生きたものとして現実化される。ここに「対話としての教育」の意味があると考えた。今日の教育方法論からみると、教材との出会いの論議で不十分な面がみられるが、人格教育の重要性を指摘した点で評価できる。

教材との出会いについての論議として注目したいのは、アメリカのミシガン大学教授 B. G. マシアラス (Byron G. Massialas) らによる 1967 年の著書『教室における創造的出会い—発見による教授と学習』<sup>7)</sup>である。彼等は発見的方法 (discovery method) による教材研究を示しており、理科や算数の教科だけでなく、音楽や国語や歴史等についてもとりあげている。未知へのチャレンジを重視し、発見学習の特色である選択的思考と認識の過程を重んじている点が高く評価される。

### (3) 人間性志向・人類性志向をもった総合的判断力を鍛える

これからの保育者は、人間性志向と人類性志向についての理解をもっていることが望ましいと考える。人間性志向は、民主主義教育哲学の典型であるジョン・デューイ (John Dewey, 1859-1952) の教育哲学の特色を示す概念である。彼によれば民主主義は努力なしに自動的に存続していくものではない。民主主義は人間性の可能性への生きた信仰によって動いていく政治制度であり、生活様式である。人間性のなかでとくに重要なのは、知性である。人間の知性への信仰というのは、人間の知性が完全であるという信仰ではなくて、知性の発達の条件が整えられれば、知性は発達することができるという信仰なのである。デューイは人間性への信仰、すなわち人間の知性の発達の可能性への信仰こそ民主主義の精神的基礎であると考

えた<sup>(8)</sup>。私の考えでは、人間性は知性のみならず感性の豊かさ、隣人愛、人類の志向等をも包含することも大切である。

人類性志向ないし人類的志向の教育 (mankind oriented education)<sup>(9)</sup>は、私に関心を持ったボストン大学教授であった T. ブラメルド (Theodore Brameld, 1904-1987) の教育哲学の特色を示す概念である。彼は教育も政治や経済と並んで、社会改造の役割を持つことを重視する改造主義 (Reconstructionism) の立場に立っている。民主的世界文明の確立と人類の合意の必要を説き、人類性志向の教育の重要性を強調した。これこそ真の人類文化の創造のフロンティアであると考えていた。

世界の現実をみると、暴力ではなく人間の知性が重視され、一国中心主義ではなく人類の合意・共生が尊重され、実現されていくことは容易ではないが、その実現への努力が緊要である。

## 5. 国際性の育成

### (1) 自民族中心主義に陥るな——異文化理解の重要性

日本人がこれからの世界で生き抜くためには、国際化が重要である。国際化のためには、自国の文化の長所を理解し、他国の文化に建設的に接し、両者を客観的に省察し、国際化が必要とする能力・価値観・態度、これらを総合した国際性の育成が大切である。

国際化とは、外国や外国の人との交流に止まらず、異文化理解や異文化との共生の態度を身につけることが必要である。過去においては、日本民族は文化多元主義の考え方が弱く、自民族中心主義の傾向が強かったことは否めない。アジア諸国に対する優越感を抱いてきた。このような態度は速やかに精算することが必要である。また日常的には、食事のしかたや挨拶のしかたでも、国によって違っていることも留意しておくことが大切である。

### (2) 歴史を心に刻む

太平洋戦争をめぐる歴史認識を正しくし、民主的な歴史観を確立することは、欧米特にアメリカに対する劣等感とアジアに対する優越感を、永い間形成されてきた日本人にとっては、容易ではな

い課題であるように思われる。歴史認識の問題について、私たちに多くの示唆を与えたのは、元ドイツ大統領リヒャルト・フォン・ヴァイツゼッカー (Richard von Weizsäcker, 1920-) である。同氏は 1985 年 5 月 8 日ドイツ終戦 40 周年の日に、歴史的な演説を行っている。その中で特に人々を感動させたのは、次の一節である。「過去をあとから変えたり、なかったことにすることはできません。しかし過去に対して目を閉じる者は、現在にも盲目となります。非人間的な行為を心に刻もうとしない者は、新しく起きる非人間的なものに負ける危険に陥りやすいものであります」<sup>(10)</sup>。同氏はしばしば“歴史を心に刻む (erinnerun)”という言葉を用いている。それはただ過去の悲劇や怨恨の思いに固執することを意味するのではない。ユダヤ人や周囲の国民に対してナチスが行った非人間的な行為を、ドイツの人々がしっかりと想起し、心に刻むことによって、過去が生み出した現実を変革する力とし、ユダヤ人や周囲の国民との間の亀裂を修復する和解が可能になったのである。同氏の歴史認識と和解の心とは大きく異なったものを、これまでの日本の保守政治家を含め、かなりの日本人の思考様式の中に見ることができ、アジアの中で孤立しないためにも、特に太平洋戦争の歴史を心に刻むことが大切である<sup>(11)</sup>。

### (3) ライシャワーの遺言

アメリカのハーバード大学日本史教授で日本大使もやったことがあるエドウィン・O・ライシャワー (Edwin O. Reischauer, 1910-1990) は日本の国際化について多くの示唆を与えてきた。1989 年の著書『日本の国際化』<sup>(12)</sup>の中で、次のことを強調している。国際化に必要なものとして「稼動する国際人」、即ち自らの思想を表明し、外国人の相手を説得できるコミュニケーション能力を身に付けた国際人と、「存在する国際人」、即ち外国人に会ったこともなく、外国語を話さない田舎の人で、テレビや新聞や読書等で勉強して、日本は世界についてもっと広い見方をしなければならないという理解に達した人々が多くなること、これからの日本では必要になることを強調した。

同氏が亡くなった後に出版された『ライシャワーの遺言』<sup>(13)</sup>では、次のような印象的なことばに接することができる。「世界は今変化の速度を上げ

ながら、人類が経験したことのない生存環境に適応することを、人々に迫っている。しかし多くの人々はその事実気付いていない。これから20~30年の間、人類は滅亡の淵にそそり立つ絶壁の小径を深い霧に包まれて歩き続けなければならない。核兵器の管理や制御も不安定であり、地球環境の破壊も深刻化しているのに、事態に有効に対処できる国際組織が存在しない。……日本は自国中心の意識で世界に対処し、世界の存続より日本の繁栄と外国にどうみられているかに関心を払っている<sup>(14)</sup>。彼は日本が島国根性を捨て、異文化理解と人類共生の哲学を身に付けることの大切さを強調していることに注意したい<sup>(15)</sup>。

## 6. 価値観と信仰

### (1) 教育的価値の基本問題——倫理的・精神的価値、民主主義、創造性

近年価値観の多様性が指摘されているが、個人の次元では何らかの価値観や価値志向をもっている場合が多い。オウム真理教の指導者のように多くの人々を無差別に殺傷して平然としている動きや、BSE問題をめぐって食品会社が虚偽の申告をして利益をえようとした動きなど、自律的倫理の欠如を示している。自立性の確立は近代的倫理の特色であったが、今日では人類的志向の倫理の育成も要請されている。日本の人々は、自律的倫理と人類的志向の倫理との二重の課題に直面している。この課題は、伝統的な愛国心を強調する国家主義的な倫理観では解決できないと思われる。

民主主義については4章の(3)でも述べたように、民主主義は、人間の知性のみならず、感性の豊かさ、隣人愛、人類的志向と結び付いていることが必要である。アメリカの宗教哲学者パウル・ティリッヒ (Paul Tillich, 1886-1965) は民主主義の精神的基礎として、カルビニズムやピューリタニズムをあげ、神道や仏教のような神秘的類型の宗教は、政治や文化に貢献したが、民主主義の精神的基礎とはなりにくいことを述べている<sup>(16)</sup>。その理由は神秘的類型の宗教は、人格と呼ぶ主体性をもった自我に関心をもち、民主主義にとって必要な個性的自己の発達を妨げてきた。神秘的類型の宗教による個の否定からは、民主主義において要求される実在の力動的な変革は生じないか

らであると述べている。これからの民主主義では少なくとも個の確立と共に人類的志向の哲学が要求されると考える。

次に今日の創造性は人間と人類との福祉に役立つ斬新なものをうみだす力であると考えられる。1940年代にジョン・デューイは、創造性のめあては、科学を人間化し、科学を民主主義的希望と信仰に奉仕させることにありと述べ、科学の創造性と民主主義との関連の在り方を示唆した<sup>(17)</sup>。セオドール・ブラメルドは日本と韓国で行った講演を纏めた著書『力としての教育』(1965年)で創造性について述べ、特に三つの特色をあげている<sup>(18)</sup>。それは率直さ (honesty)、斬新さ (innovation)、洞察力 (insight) である。率直さを育てるには、生徒や学生と教師が信頼感をもち、自分たちの思考と感情を自由に表現できる場が保証されていることが必要である。斬新さは生徒や学生たちが固定した標準と異なったものを作り出すことを励ますところから生まれる。洞察力即ち物事の理解を助ける発見の閃きは、前の二つがなければ、生じにくいものである。教師は学習者の問題解決を励ましていくことが、洞察力の発達の苗床となる。

また同氏は1970年の著書『高潮期の数十年：教育への要請』<sup>(19)</sup>で、民主的世界文明の確立と人類の一致・合意の必要性を説き、人類的志向の教育の重要性を強調した。これこそ人類平和創造のフロンティアであると言える。このような平和創造の開拓者としては、少なくともアルベルト・シュヴァイツァー (1875-1965) のアフリカでの医療奉仕、宮崎松記 (1901-1972) のインドでのハンセン病患者への医療奉仕<sup>(20)</sup>、マザー・テレサ (1910-1997) のインドでの社会福祉活動等をあげることができる。

### (2) 愛・創造・忍耐 V. E. フランクル、日野原重明の思想から

オーストリアの精神科医 V. E. フランクル (Victor Emil Frankl, 1905-1997) は、ウィーン大学神経科教授として活躍した。ユダヤ人であったため、第二次世界大戦中ナチスによってアウシュヴィッツ強制収容所に拘束された。ナチスは150万ものユダヤ人を虐殺した。彼は辛うじて生き延びたが、その時の記録を1947年に『強制収容所における一心理学者の体験』(邦訳は『夜と

霧』)<sup>(21)</sup>や『それでも人生にイエスと言う』<sup>(22)</sup>などの著書として出している。それらを通して、彼は人間が生きるには、次のような三つの価値が大切であることを述べていることに注目したい。

- 1) 人間は創造する存在であるということ。何かを作り出す創造に生きがいを見いだす。
- 2) 人間は愛するということに生きる意味を見いだすこと。愛の体験の中に、人として大切な生き方を見いだすことができる。
- 3) 人間は苦しみや悩みに耐える存在であるということ。強制収容所のような地獄のような状況にも耐えるということが、人間の価値観の中でも重要なものである。

彼が逆境に耐え抜いて生きていくことの大切さを自ら実証した点で感動的である。

聖路加国際病院理事長日野原重明(1911-)博士は今もなお元気で超人的な活躍をしている。1998年の柳城学院創立百周年の時には、「新しい世紀へ創造と愛を」<sup>(23)</sup>と題して感動的な記念講演をしていただいたことが想起される。2002年の『豊かに老いを生きる』(新版)<sup>(24)</sup>の中で、先にふれたフランクルの三つの人生における価値をとりあげ注目している。また2003年3月福岡で行われた「老いをいかにすこやかに生きるか」<sup>(25)</sup>と題した講演会で、愛すること、創めること、耐えること、この三つの道を努力して歩むことの大切さを述べている。この三つの価値は、年長の人に限らず、若い人にも大切なことである。これら両氏の思想を支えているものはキリスト教信仰であることにも注目したい。

### (3) 人間的教育への改革のために

新しい世紀、新しい時代を切り開いていくには、自民族中心主義や集団志向の日本の伝統への単なる回帰ではなく、個の確立と人類的志向の倫理を共に実現し、自己実現と世界の平和実現のビジョンを持たなければならない。そのために教育も献身する必要がある。そのような課題を担った教育は、民主的価値観、確かな知識・技術、豊かな感性、不屈の意志、健康、道徳的实践力、創造的態度等の総合された新しい意味での人間的教育でなければならないと考える<sup>(26)</sup>。この場合の民主的価値観には人類的志向が含まれることはいうまでもない。

多くの若者が、自分も持っている賜物や才能を伸ばし、自己の人格の完成と社会への貢献と人類の共生と世界の平和の実現という大きな夢と希望を抱いて、新しい歩みへと邁進してもらいたいものである。

### 【注】

- (1) 羽仁進著『2たす2は4じゃない』筑摩書房、1975年、57頁。潮木守一「人間形成の社会的基盤」田浦武雄編『教育の原理』名古屋大学出版会、1983年、89-96頁。田浦武雄著『改訂版教育学概論』放送大学教育振興会、1990年、60-61頁。
- (2) ILO・UNESCO, Recommendation Concerning the Status of Teachers, 1996. ILO・ユネスコ編、文部省初等中等教育局地方課訳『教員の地位に関する勧告』1967年、7-10頁。田浦武雄著『改訂版教育学概論』放送大学教育振興会、1990年、130-131頁。
- (3) Allan Bloom, The Closing of the American Mind: How Higher Education Has Failed Democracy and Impoverished the Souls of Today's Students, Simon Schuster, 1987. 菅野盾樹訳『アメリカン・マインドの終焉』みすず書房、1988年。
- (4) E. D. Hirsh, Jr., Cultural Literacy: What Every American Needs to Know, Houghton Mifflin, 1987. 中村保男訳『教養が国をつくる』TBSブリタニカ、1989年。
- (5) 田浦武雄・善家優佳「文化的リテラシー論の地平」田浦武雄編『アメリカ教育の文化的構造』名古屋大学出版会、1994年、129-145頁。
- (6) マルチン・ブーバー著 植田重雄訳『我と汝』(岩波文庫)岩波書店、1979年。
- (7) Byron G. Massialas and Jack Zevin, Creative Encounters in the Classroom: Teaching and Learning through Discovery, John Wiley, 1967. 田浦武雄、水越敏行、甲斐進一、斉藤勉共訳『教室における創造的出会い：発見による教授と学習』黎明書房、1973年。
- (8) John Dewey, "Democracy and Educat-

- ional Administration" in Problems of Men, Philosophical Library, 1946. p.60.  
田浦武雄・宮田学訳「民主主義と教育行政」杉浦宏・田浦武雄編訳『人間の問題』明治図書、1976年、64-65頁。  
田浦武雄「デューイ思想の今日的意義」『日本デューイ学会紀要第29号』、1988年、147-148頁。
- (9) Theodore Brameld, The Climactic Decades: Mandate to Education, Praeger Publishers, 1970. pp. 181-194. 田浦武雄『教育改造の思想』黎明書房、1968年、158-172頁。
- (10) Richard von Weizsäcker, 40. Jahrestag der Beendigung des Zweiten Weltkrieges. 1985. 永井清彦訳『荒れ野の40年：ヴァイツェッカー大統領演説全文（1985年5月8日）』岩波ブックレットno.55、1986年、16頁。
- (11) 田浦武雄「歴史観と日本人の思考様式」名古屋柳城短期大学研究紀要第23号、2001年
- (12) エドウィン・O・ライシャワー、納谷祐二、小林ひろみ著『日本の国際化—ライシャワー博士との対話』文芸春秋社、1989年、544-545頁。
- (13) 納谷祐二・小林ひろみ著訳書『ライシャワーの遺言：Bridge to the 21st Century—Exploring Dr. Reischauer's Thinking』講談社、1993年、11-12頁。
- (14) 同上、12頁。
- (15) 田浦武雄「国際化と日本人の思考様式」名古屋柳城短期大学研究紀要第22号、2000年
- (16) パウル・ティリッヒ著、武藤一雄訳「民主主義の精神的基礎」高木八尺編訳『ティリッヒ博士講演集文化と宗教』岩波書店、1962年、121-147頁。
- (17) John Dewey, "Democratic Faith and Education" in Problems of Men, 1946.  
ジョン・デューイ著、田浦武雄・甲斐進一訳「民主的信仰と教育」杉浦宏・田浦武雄編訳『人間の問題』37-38頁。
- (18) Theodore Brameld, Education as Power, Holt, Rinehart and Winston, 1965. pp.56-59  
田浦武雄「価値観と日本人の思考様式」名古屋柳城短期大学研究紀要第24号、2002年、5-6頁。
- (19) Theodore Brameld, The Climactic Decades, Praeger Publishers, 1970, pp.185-194.
- (20) 宮崎松記『ボダイ樹の木陰で—インド救ライへの道—』講談社、1969年。  
田浦武雄「キリスト教福祉の道標」名古屋柳城短期大学研究紀要第18号、1-10頁
- (21) Victor E. Frankl, Ein Psychologe erlebt das Konzentrationslager, Kösel-Verlag, München, 1977. ヴィクトール・E・フランクル著 池田香代子訳『夜と霧：一心理学者強制収容所を体験する』みすず書房、2002年。
- (22) ヴィクトール・E・フランクル著 山田邦雄・松田美佳訳『それでも人生にイエスと言う』春秋社、1993年（原著は1947年刊行）。
- (23) 日野原重明「新しい世紀へ創造と愛を」名古屋柳城短期大学研究紀要第20号、3-12頁
- (24) 同上『豊かに老いを生きる（新版）』春秋社、2002年。
- (25) 同上「老いをいかに健やかに生きるか」中日新聞2003年6月24日号。
- (26) 田浦武雄『改訂版教育学概論』放送大学教育振興会、1990年、39-41頁



## **For the Benefit of Students' New Human Course** **— Creative Encounters and Human Building —**

Taura, Takeo\*

The outline of my final lecture in Nagoya Ryujyo Junior College on January 31, 2004, is recorded in this paper.

In this paper I will discuss the following six topics:

1. We should take the responsibility to realize a peaceful and worthwhile society
2. Dealing with the well-qualifications oriented society
3. Improvement of a good education of society
4. Learning for educational encounters
5. Cultivation of the internationality
6. Value orientations and faith

In order to bring about the desirable new age, Japanese persons should realize the individuality and the humankind-oriented ethics, and should have the desire for self-realization and the vision of world peace.

Today's education should be the humanizing education which synthesizes the democratic orientation, the reliable knowledge and skills, wholesome sentiments, the indomitable will, a good health, the ability to practice morality, and creative attitudes. etc.

キーワード：原爆体験，創造的出会い，人類的志向，総合的判断力，人間の教育